

## 第9回大会のテーマ

『21世紀の学校教育とカリキュラムの構造  
—血統—学歴—資格、そしてそれらを越えて—』

日英教育研究フォーラム代表 鈴木 慎一

英国では、今秋からナショナルカリキュラムが改訂され、シヴィックスの新たな導入と宗教育の有り様を巡って、議論が錯綜してきました。日本では2002年から一斉に始まる「総合的学習の時間」を巡って、さまざまな試みが始められています。平行して行われている、初等教育段階から導入される詠御教育についての識者間の議論も、賛否両論多彩です。完全週五日制も私学がどう取り組むかによってその帰趨が案じられます。英国も日本も、高等教育の制度的な枠組みとそこでの教育を巡って議論が絶えません。二つの国の、学校教育とカリキュラムを巡る錯綜した状況と議論は、何が原因で、何を本来は目指すべき議論なのでしょう。

今年の日英教育研究フォーラムでは、『21世紀の学校教育とカリキュラムの構造』という表題の下で、学校教育の意味とカリキュラムの意味とを再検討したいと思います。かつては家柄によって社会的進路が決められていました。近代化の足並みに沿って、その基準は学歴に変わり、そして、現代化のステージでは基準は資格に転じるという具合に、子どもたちと青年の社会参加、あるいは社会移動の構造は大きな変動を経て今日に至りました。子どもたちと青年の社会参加の道筋と構造は、更に何処へ赴こうとしているのでしょうか。それは従来の社会構造を再生産するだけなのか、あるいは、人々を解放するものになりうるのか。

英国では、Demolition of Britain という表現に見られるように、そのガヴァナンスの形が変わりつつあります。そのような大きな社会的政治的枠組みの変化の中で、16歳以降の教育に大きな関連をもつ諸資格試験制度とコースの再編成が進んでいます。

日本も例外ではないように思います。昨年から今年にかけての一連の立法（国歌国旗法、「盗聴法」、防衛関連立法等々と、少年法改正の動向を注視するとき、日本型ガヴァナンスの組み替えについて、公論が動き始めています。2002年の学習指導要領の改定とこれらの動きとはどのような構造的連関をもっているのでしょうか。

フォーラムでは、改めて1980年代以降の教育改革を推し進めたものが何であったのかを振り返りつつ、新しい世紀を迎えようとする時期に学習の意味とその内容が変わろうとしていることを出来る限り多面的に議論してみたいと思います。多くの方々の参加をお待ち致します。